

逢坂

昭和四十八年三月一日発行

著者

梶原球子
京都市北区紫野上若草町九

装幀

梶原緋佐子

印刷

美研

定価

五〇〇円

発行所 株式会社
河原書店

逢

坂

目

次

鎌倉物語

………

五

逢坂

………

四九

卑しき生

………

一二七

城の中

………

一四五

晩春日記

………

一七七

東山物語

………

二二七

あとがき

………

二六九

鎌^か_ま

倉^く_ら

物^も_の

語^が_り

鎌倉物語

(一)

朱を流したような夕焼けの空であつた。海はその果てまでを金色の波に染めて浜の砂子に戯れている。ただ砂のみがほのかに暮れる薄暮の嘆きのうちに消えかゝっていた。

夏も終りの浜の夕ぐれは殊に寂しかった。はまゆふの吐息がきかれるくらい。その静かな由井ヶ浜の砂を刻むように、遠く山手の方から浜辺に近づいてきた一輛の車があつた。

薄暮にも塗の色が際立っていた。御簾の色、紫の房にも乗物の主がそれと覗がわれるようであつた。もしも行き交う人があつたら、必らず振返らずにいられないだろう。それにしては供の者が少なかった。然もほんの下部が前後に二人づつの四人きりだった。何れは高貴の人の忍びの姿であらうと思われた。

車は浜に出るときながら長汀曲浦の磯から磯を迂って行くようであつた。むせるような潮の香にも、次第に変わって行く夕景色にも何の拘りもなく、漸やくすべてが薄暮の中に落ちようとする時、ついと海に背を向けたかと思うと、松林を越えて、そこだけはまだかす

かに光を止めている砂丘の蔭へ入って行った。そこから道は細い坂道になっていた。

一方には竹林があり、その前には角から土塀を引廻らせた可成り立派な家があった。門際にはもうほの白く萩の花などが乱れ咲いていた。

内なる人の手がそつと御簾をもたげたと思うと、ちらつと烏帽子の先が動いて、車はびつたりとその門際に止った。と、殆んど同時だった。さつと門の戸が開いて内からは一人の白髪の老人が慌しく現われた。

「お待ち申し上げておりました。」

老人は車から下り立つ人を助けんばかりに迎えるのであった。

にも拘らず、その客は殆んど眼前のものには一瞥すらも与えず、ただ老人に一寸眼くばせをした切りですつと門の中へ吸い込まれるように姿を消してしまった。

後には老人と下部達の間に、秘かな私語がかわされる。老人は一段と声を落して

「御苦労じゃった。皆の者、さあ、これは殿様よりの下されものじゃ」

四人の下部達は無言のまゝ、頭を下げ、その金包であろうものを押し頂いた。

「では、何時もの刻に、必ず他言は許さぬぞ、若し、尋ねられたその時には……解つて

おろうな」

「はい、はい、それはもう……」

下部の一人が震えながら答えると、もう車は向きをかねて坂道を迂り出していた。そして見る間に夕日の名残りも見られなくなった薄暮の中に影を消してしまった。

(一一)

頼朝は最初の一瞥から女が沈んでいるのに気がついた。飛び立つように出てきは来たものの、どこかに悲しみの影がそっていた。

「どうしたと云うのじゃ」

頼朝はこんな無理をして来たのに……と思うと少し腹立たしかった。女は良橋太郎入道の娘、亀の前であつた。

頼朝は過ぐる春の伊豆の旅舎で自から彼女を知ったそれ以来の昵近である。

「殿様こそどう遊ばしましたのでご座います？」

亀の前は訴たえずにいらなかった。実際、十日も頼朝が来なかったと云うことは初めて

であつたから。

「私、もうどうしようかと毎日泣いて居りました。それで、まだ、こんなに悲しみの色
が取れないのでご座いますわ」

そう云つて初めて亀の前は頼朝の顔に微笑を投げた。紅花の小袖が一層彼女の顔を幼く可
憐に見せるのであつた。

「ハ、ハ、ハ、そのことか」

頼朝が笑っていると、先刻の白髪の老人、小中太光家が入ってきた。その後から侍女が
うやうやしく捧げながら銚子を運んで来る。

「爺、頼朝は今叱られているところだ、ハ、ハ、ハ、」

「それは、そうでございましょう」

小中太も笑つた。

「小中太殿、お前からもたんとお恨みを申上げて下さいな」

「はい、はい、申上げますとも……然し、何んでございますな、殿様ほどお仕合せな方
もたんとございますまい」

頼朝はふと何か思い出したように、小中太の言葉を遮ぎった。そして鋭い眼に意味を含ませて小中太を見た。

「どうじゃ、この間のことは？」

「ハッ、申遅れまして相済みませぬ。丁度よいところがございまして、一昨日話をつけて参りましてございます。」

「それは大儀、何処じゃ、よく即刻よいところがあつたものじゃ。」

「さればでございます」

小中太光家は誇らしげにうなづき

「左様、某の家からまだ半里はございましょうが、飯島と申しまして、ずっと東に振つた山手でございます。矢張り松林を片方に受けて伏見冠者廣綱の邸がございます。あすなれば静かなことはこの上ございませぬ、全く誂え向と申すものでございます。」

「そうか、だが、廣綱がよく承知致したな。」

「某が得心させましてございます。と申しますより、殿様のお声懸りとあれば誰が何で否応申しましょう。」

「そうだったな」

頼朝は苦笑した。苦笑せずにいられないものがあつた。彼は思っている。

恐らく、現在、自分に背く者は鎌倉は愚、東国は元より、四国、中国にもないと信じている。それなのに何故そんなことを聞いたのだろう？ けれども頼朝は矢張り、救われたような気がするのであつた。否、それ以上に小中太光家も救われたに相違なかつた。

「爺、貴様もこれで厄のがれたな」

そう云う頼朝の眼にはもう何か残忍の色が染っていた。

「どう致しまして……殿様、では某はこれで失礼させて頂きます。」

「ハ、ハ、ハ、」

頼朝は大笑した。そして、亀の前の方を向いて

「何を考えているのだ？」

「哀しい夢を思い出しておりました。私は昨日も一昨日も暁方まで哀しい夢に責められてほとほと眠る事が出来ませんでした。」

「そんなつまらない事を考えずに、そちはただこの頼朝を信じておればよいのだ、なあ

信じて居れ、何も恐れる事はない、哀しむような事もないのだ、頼朝はどんなことがあつてもお前を捨てるようなことはないのだ。俺は鎌倉の権力を握っている男だ、いや、鎌倉ばかりではない、西も東も、京の都に迄、俺の勢力は広い。わしの威光は国のどんな隅々までも輝やいているのだ。

わしに背く者、わしの自由を奪う者、俺を困らせる者、そんなものは一人もありはしない。わしは自由で偉大な権力者だ、そう云う俺に愛されているお前が何の為に哀しい夢など見るのだ、それは寧ろ俺に対する侮辱だよ。

……俺はお前が好きなのだ、伊豆にいるお前をわざわざ呼んだあの頃より一層好きになつてゐるのだ……」

「お赦し下さいませ」

亀の前は嬉しさと勿体なさに堪えられないような重壓を胸に感じながら、頼朝の情熱の中にくづ折れて行つた。

「ほんに勿体ない、殿様ほどのお方に可愛がられて心の不安に寝られないなどと申す私はまあ何と云う……あ、それはもうどんなに嬉しいことでございましょう、たつた今が今

殺されても、さらさらお恨みとも存じませぬ。なれども、ただただ女子の愚かさと申しましようか、私はどのように偉いお方でも隅にはお心にそわぬ事もあるかとて、つつい取り越し苦勞を申上げました。

でも、もう今日のお言葉を頂きまして、心の曇も晴れましてございます。もう何事も思ふことではございませぬ。私は何時も何時も殿様のお身の中に抱かれて居りますもの、二つ心になる筈はございませぬ。もうもう何事も苦にはいたしませぬ。」

龜の前はしみじみと頼朝の力強さにひかれて行く自分を今更のように感じながら、思うのであった。晴ればれと顔も輝やいてきた。

「どうしてこのような偉いお方が、一人の御台様をそんなにも恐れていらつしやるなどと云うことがあろうか？　嘘だ、皆嘘だ。梢は何んと云う間違いをきいて来たのだろう小中太殿も頼りない……。」

頼朝はいつもの明るい春のような和やかさを取返した龜の前を見ていると、不思議に氣持が落付いてくるのだった。

「久し振りだ、そちも飲まぬか」

云いながら、頼朝は頼りに杯をあけた。心よい酔が一層彼の心を動かした。彼はつくづくこのまゝ、今夜だけでも此処で泊って行きたいと思つた。

「おい、伊豆の話でもしてくれ、俺はお前の口から伊豆の話を聞くのが一番好きだ、楽しいのだ。……」

「もともと伊豆と云う処はわしには半分は苦い思い出だったが、お前を知ってから、俺はもうその苦い思い出だけは皆心から追い出してしまったのだ。お前はあの最初の晩良橋の家の海の見える部屋で、蛭ヶ島の歌を唄ってきかせたじゃないか。」

「まあ、そんなことを覚えていらつしやいましたの。」

亀の前は澄んだ瞳を見はるようにした。

「唄ってくれ、唄ってくれ」

頼朝は自分でも不思議なほど、まるで廿歳の若殿様のようなはしゃいだ気持になっていた。亀の前は唄い出した。

沖つ浪

蛭ヶ小島の磯に咲く

波の花あわれ、わが思うこゝろ